

編集室から

この時期は、休日となれば殆ど草刈です。日中は暑いので、もっぱら野良仕事は早朝・夕方。梅雨と上昇する気温を追い風に、稲もぐんぐん生長していますが、雑草も負けじとみるみる大きくなっています。

先日は、厚手の長袖作業着に、防虫ネット付き帽子という重装備で出かけたにも拘らず、その上から左腕3箇所・右腕1箇所、さらになんと右耳までアブに刺されてしまいました。夢中で草刈機を回していたためか、帰宅してパンパンに腫れた腕を見て気付く始末。耳は、スターウォーズのヨーダみたいに腫れ上がり、歩く・頷く度にぶらぶらと揺れるのを感じるほど。幸い、皮膚科から処方を受けていた虫刺され薬を一所懸命塗って3日後には腫れも引きました。

こんな想いをしてでも草を刈るのは、防虫対策です。昨年大発生したカメムシの子がまた大発生するらしく、しかも飛んで移動するタイプなので、できるだけ稲の周りに草を生やさず近寄せないに限ります。カメムシは稲の実の汁を吸い、米粒を黒化させます。農薬という名の殺虫剤・除草剤を撒けば、苦労は激減しますが、それは避けたいので、仕方ありません。多くの農薬不使用農家は、同じような想いをしてはいますが、作物の価格に労働の対価を期待できる程の差はありません。

ほんの6～70年前まで殆どの国民が何らかの生産に携わっていたため、作り手の苦労は「言わずもがな」でした。しかし今では、農家の善意に支えられて都市民は生きているのではないかと思うほど、作り手の気持ちがわからない暮らしをしています。

今の平和が無限に続けば良いのですが、果たしてご家庭の生活安全保障は大丈夫でしょうか？是非、近隣の農家の方々と、懇意にされておく事をお奨めしたいと思います。(は)



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



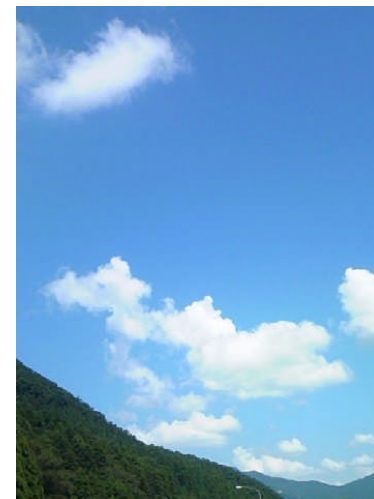
2012/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217
Fax 076-233-7375
Email usric@neting.or.jp

2012/08
(株)アスリック
<http://www.neting.or.jp/usric>

景月



何に見えますか？
北陸自動車道にて
by hama

寄稿『ブルーベリーの魅力』

関市板取ブルーベリー振興会会長 長屋正幸

岐阜県の板取に生まれ育った私は、兼業で農業を行う、いわゆる半農半Xです。

平成七年からブルーベリーの栽培を始め、さらに七年前の平成十七年からは肥料を施さない『自然栽培』に取り組み始めました。三年前からは、米の無施肥栽培にも挑戦しています。

ブルーベリーは人気の高い果物で、多くの人が興味を持っておられるようです。

ご縁を頂いた方に、ときどき「ブルーベリーの最大の魅力は何だと思いますか？」とお尋ね致します。すると、「目に良い」「健康に良い」「美味しい」と答えられる方が、大半です。確かにそれらは事実なのですが…

ブルーベリーの実には、黒い表皮の中に、果肉と小粒の種が詰まっていますが、じつはこの粒を皮ごと種ごと、つまり、そのまま丸ごと食べる事ができます。

皮や種ごと食べる事ができて、ヘタ・皮・種・芯等の捨てる所が一切出ない作物って、他に有るのでしょいか？私も思い浮かべては

みるのですが、残念ながらそんな作物は、ブルーベリー以外に思い当たりません。

また、健康に良いと言われていている作物も数多く有りますが、『良薬は口に苦し』というところ、大抵は苦い・臭い・酸っぱい・辛い・不味いなど、何等かの食べづらさがあるようです。

さらに、小粒なので冷凍し易く、保存中の変色や変質も少ないので、長期にわたって美味しく食べることがすることも大きな特徴です。

種ではなく、実をそのまま土に埋めても自然に芽を出しますので、ブルーベリーの果実こそ、『命そのもの』ではないか、と思えるのです。

そんなブルーベリーだからこそ、その最大の魅力について、私はこうお話しています。「命そのものを丸ごと戴けることです」と。

『命』そのものを丸ごと美味しく食べる事ができ、健康に役立ち、廃棄物が出ず、生食でも加工品でも利用でき、冷凍や乾燥で長期保存ができるお洒落で可愛いブルーベリーは、スーパーフルーツだと、そう思えてならないのです。



【プロフィール】
（ながやまさゆき）岐阜県関市板取出身。父親創業の建築会社を経て、平成十二年に独立、半農半Xとなる。無施肥・無農薬の自然栽培を実施。

濱のつばやき 『燻煙』

齢三十を少し越えた頃、都市計画者として些かの迷いを生じていた。ちょうどその時、欧州に都市と田舎の素敵な関係を築く都市計画制度を視察する機会に恵まれた。その団長をされ、団員を導いて頂いたのが、元広島大学教授の津幡修一先生だった。有難くもそれ以来、先生とは家族ぐるみのお付き合いをさせて頂いている。

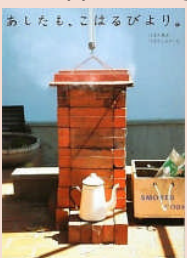
先生のご自宅は、愛知県のとある住宅団地の一角に、二区画を使って平屋・蔵とキッチンガーデンが広がっている。建築家として多くの団地も手がけられた先生の作品であるご自宅は、とても素敵なログハウス。そこに、年数を掛けて雑木林・果樹林を造られ、畑はキッチンと区画されて広がっている。若い頃から、ヨットマンとしても世界の海を駆け抜けてこられた先生の持論は「第二の人生からではなく、最初から自立できる暮らしのスタイルを確立すべし」であった。志と言行のこれほど徹底された生き様は、見事としか申し上げようが無い。そんな先生ご夫妻の暮らし方は、多くの出版社からの著書となって世の人々の知る所となつている。

その近著が版を重ね、なんと数万部に及ぶヒット作となつていらっしゃる。タイトルは「あしたも、こはるびより。」先生お手製でレンガ造りの燻製塔から煙が

たゆとつている表紙の写真。この中から生まれ出るスモーク達のお裾分けを頂戴する事に浴したことがある。それがまた絶品。この味を越える燻製には未だかつて出逢った事が無い。我が家にもアウトドア用の簡易燻製器があつて、チーズなどを時々燻すのだが、先生の作品には遠く及ぶべくもない。料理好きの家内は、先生の燻製をホンノ小片に刻み、少しずつ少しずつ使っている。そしてこう言つのである。「ねえ！早く先生みたいに燻製塔を作つて頂戴。」

野良仕事をしていると判るのだが、早朝と夕方は夏でも比較的過ごしやすい。先生ご夫妻も美味しい昼食を摂つてから、一番暑い時間帯は、シエスタ。お昼寝とは言わない。これも国際派のおしゃれな暮らし。しかも、理に適つたエコロジカルでヘルシーなスタイルでもある。八十六歳の先生と、八十三歳の奥様の笑顔と喜びの溢れた暮らしがたつぷり紹介されている同書は、現代人に「人間の幸せの原点とは何か」の啓示でもあるように思える。

消費税が上がる。暮らしの全てを金銭で賄う家計には痛いである。が、自らの労働と引き換えに、自然の恵みを頂く暮らしには、衝撃は穏やかなはずである。この機会に、心身と家計に優しい暮らし方。始めてみては如何であらうか。



きただより53 弘前大学地域社会研究会 上村 康之 『秋田市中通再開発「エリアなかいち」オープン』

中心市街地の疲弊による空洞化、それに対する「中心市街地活性化基本計画」による施策展開は、地方都市に共通する課題である。とりわけ、秋田市は東北地方の類似規模の都市と比較しても中心市街地の状況が厳しいという評価がされていた。その象徴ともいえるのが「中通再開発地区」であり、秋田駅西口から約600mに位置し、1997年、秋田赤十字病院の郊外移転で生じた大規模未利用地、周辺の老朽化したビル群などと一体的な開発に対し市民、県民からも関心が寄せられていた。しかしながら、様々な再開発案が出されては消えるという紆余曲折の連続があり、この間にも郊外の商業地域が拡大するなか、再開発地区に隣接するかつて秋田県一の賑わいを誇った広小路商店街などの衰退は進む一方であった。

具体的に事業が動きはじめたのは、2007年11月に中通一丁目地区市街地再開発事業推進協議会にて、現計画の整備方針について最終合意がなされてからであった。そして、『中通再開発「エリアなかいち」』は15年半の時を経て、この7月21日にオープンした。施設は、秋田県立美術館（移転）、秋田市にぎわい交流館（多目的ホール、展示ホール、研修室、各種工房スペースなど）、商業（29店舗）・駐車場棟、住宅棟（9月より入居開始）で構成されている。

1997年の最初の案では、8階建の商業施設が中心の複合ビルが構想され、総事業費188億円を見込んでいた。パブル崩壊後とはいえ、まだその余韻が残る時代であった。現計画は総事業費135億円（112億円が公費）と、大きく圧縮され、床面積では県や市が7割、民間が3割となった。特に商業施設の規模は、当初の13分の1の3,700㎡まで縮小された。社会経済状況、秋田市や再開発地区を巡る変化を勘案すると、まさに身の丈にあった開発に落ち着き、今となっては、かつて計画された案で再開発が動かず幸いだったともいえる。ただ、身の丈とはいっても、このエリアに寄せる期待も大きく、施設構成や規模等で正解だったのか、決して楽観はできない。

筆者として、「エリアなかいち」の注目点を3点に絞り挙げてみたい。

第1点は「まちなか居住」の可能性の拡がりである。住宅棟は13階建、2、3階は賃貸住宅、4～9階はケアハウス、10～13階は分譲住宅（22戸）と複合的になっており、様々な層にまちなかで生活してもらおうという点と、特に賃貸住宅を組み入れたことにより若年層をはじめ居住者の流動性が期待できよう。

第2点は、「商業施設の業種」が秋田土産品や韓国化粧品の店を除き、ほぼ日常の食料品が中心となっている。かつての中心商店街ように市全域から買物客が訪れるというイメージではなく、住宅棟をはじめ「エリアなかいち」周辺の中心市街地に居住する住民にとっての最寄店の役割を担うということである。年に数回、月に1回の買物客よりも、ほぼ毎日利用する買物客に対するに日常的な賑わいが見込める。

第3点は、「エリアなかいち」の中央部、商業施設と美術館の間に小イベントができる2つの広場と飲食店4店と合わせ、「こみち」のような空間が生まれ、秋田駅西口から仲小路商店街から続く通りの連続性が形成された。この空間の創出により、何か新たなコトが生まれ、人の流れの活発化が進展することを期待したい。

『最近流行りの「街コン」について思う』 株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

「街コン」ってご存知ですか？街ぐるみで行われる大型の合コンイベントです。一般的な合コンと異なり、参加者は少ない場合でも100名以上、規模の大きいものでは3,000名弱にもなる。同性2名以上で1組となり、開催地区の定められた複数の飲食店を回り、制限時間内であれば定額で飲食が可能というイベントです。最近は全国各地で開催されており、「出会いの場創出」と「地域活性化」が融合したイベントとして注目を浴びているようです。

私が住んでいる学芸大学でも、お店がある目黒でもこの1年に2回ほど開催されています。さて、この「街コン」を「出会いの場創出」という視点でもいくつか議論があると思いますが「地域活性化」という点で考えてみたいと思います。

「地域活性化＝その地域に関わる住民が精神的・経済的に豊かになるための取り組み」と定義するならば、この「街コン」が果たす役割は何でしょう？

・若い人たちに街の魅力を知ってもらう？

単に出会いを求めに来た連中に何を伝えるの？それに元々開催する地域は飲食店が多い人気エリアが多い。

・来街ついでにお金を落としてもらう

夜集まって飲んで帰る。加盟している飲食店にしかお金は落ちません。

そう、しいて言うならば「地域で活動している飲食店の宣伝販促支援」という役割でしかないということかもしれません。

では、その「宣伝・販促」は効果があるのでしょうか？

・目的は食事ではなく異性とのコミュニケーション

・初めて出会う男女がドギマギしながらその場にいる環境

・一軒当たりの滞在時間が原則30分

という条件下で、そのお店の持つ魅力を果たして知ってもらえるものなのでしょうか？実際に学芸大学でもこのイベントの時しか人が入っていない店も多いです。

ですが「街コン加盟店」として参加したい飲食店は後が立たないようです。人口構造の変化や若者の酒離れなどから来る、外食産業市場の縮小は避けられない事実ですし、のお店という単店の視点ではなく、「地域の飲食業」というひとつの産業集積と位置付ければ「男女の出会いの場創出」というお題目のもと、PRとしてではなくここできちんと事業収益を上げていく考えるのもありなのかもしれません。今回は私が考える「飲食業における地域集積内での互惠関係づくり」について考えを述べたいと思います。

『富士の国から ~大魔神のたび~ 』

寸又峡温泉開湯50周年記念フォーラム(その1) 静岡県職員 溝口 久

寸又峡温泉へは、平成9年3月に由布院温泉観光協会と旅館組合の理事らと一緒にいったのが初めてだった。由布院観光総合事務所に事務局長として勤務して一年が経とうとしていた。当時、由布院温泉観光協会長の中谷健太郎さんが「Qさんを由布院に出してくれた静岡県知事にお礼に伺いたい」と言った。ちょうどその頃、観光総合事務所の職員を滋賀県長浜市にあるまちづくり役場に出向させることにしていたので、長浜市へのお願いの挨拶も兼ねていた。長浜市に一泊し、静岡県庁に向かい知事にお礼挨拶をした。その時の石川知事を囲んで撮った写真がアルバムにしっかり収められている。

目的を達した我らが向かったのが「寸又峡温泉」だった。秘境の温泉と言われる温泉地の旅館にさしたる期待もなく泊まったのが翠紅苑だった。ところが、大正ロマン調の内装、客室には炉を切ったテーブルがある小部屋も付いていて、和風クラシックホテルといった感じでとても気に入った。由布院の旅館の連中も驚いていた。



由布院から静岡県に戻ってくると、県内温泉地から結構声がかかった。総会があるので話してもらえないだろうか、活性化に知恵を貸してもらえないだろうか、等ありがたい言葉を頂戴した。中でも寸又峡温泉からは熱心なお誘いを受けた。それが今も続き、私的名刺には「寸又峡まちづくり会議実行委員会 相談役」と刷り込んである。

温泉地への直接的な誘客よりも「観光まちづくり」を進めることを説いていた。というのも由布院で「花咲かすよりも根を肥やせ」「最も暮らしやすい処こそ、最も優れた観光地である」ということをたたきこまれ、プロモーション活動よりもまちづくり活動に専念していたからである。

寸又峡温泉の宿泊客は平成4年をピークに下り傾向にあった。直接的な誘客はできないけど、何かしらインパクトのあるフォーラムやって、そこらの気づきで新たなまちづくりのムーブメントを興そうと思った。そのことは平成6年度に出向していた豊岡村で開催した黎明フォーラムをきっかけに興ったまちづくりの動きを体感したからことによる。

平成8年夏に山梨県早川町で『日本・上流文化圏構想』が産声をあげた。かつて上流で生活していた人間は農業や工業が発展するにつれて、下流で都市生活を営むようになった。しかし、上流の送りだす水やエネルギーに支えられ、繁栄を誇るかに見えた下流も、ようやくその浪費と資源の枯渇に気づき、環境の汚染にあえぎ始めている。上流圏・早川に住む私たちは、山と水

とを守り続けた先人に学び、自然とともに生き、資源を大事にし、真に人間らしく暮らすことができる地域の創造へといちはやく出発したい。そして、中流・下流の都市と役割を分担しながら、将来にわたって人間が生き続けるための自然と共生できる新しい文明を構築し、上流としての文化を創出することを目標としている。

その考えに共感した地域で「日本上流文化圏会議」を開いていた。第1回山梨県早川町、第2回宮崎県五ヶ瀬町、第3回北海道ニセコ町、第4回が寸又峡温泉がある静岡県本川根町になった。

「直接的な誘客はできないけど、何かしらインパクトのあるフォーラムで地元の人々のハートに火をつける」という仕掛けとして、この「日本上流文化圏会議」をこの地で開催することを提案した。テーマは「1000年の学校in南アルプス」だった。このテーマが難産だった。時は1999年、世はミレニウムブームに沸いていた。当時NHKの「ようこそ先輩」が放映されていて、著名人が母校の小学校に出向き授業を受け持つという場組が受けていた。早大の後藤春彦教授が翠紅苑の露天風呂で閃いた「Qさん、千年の学校ってというのはどうだろう？先人たちの暮らしに学ぶ、それを仙人として千年にひっかけて」「いいじゃないですか、それ」今も使われている「1000年の学校」が産声を上げた瞬間だった。かつての本川根の暮らしに欠かせない、水、薪、住、茶、食などの伝統的な技をもつ達人を講師役(仙人)として、こどもたちや町民、参加者とともに、体験学習をするものだった。下河辺淳、内山節、椎葉村の椎葉クニ子らを筆頭に宮崎、宮城、群馬、静岡などから農林業者、建築家、地域計画家、行政マンにより、地域に生きる哲学と実践、厳しい風土が生む力と技をめぐって、2つのセッションが2日間にわたって開かれた。千年の伝統を未来の千年に引き継いでいこうというこの会議の趣旨は全国からの参加者の共感を得ることになった。

この会議の理念を受け継ぎ、本川根町域全体を広大なキャンパスに見立て、体験的学習を通じて人づくりを、そこから魅力づくりへ、そして活力づくりへとつながっていくことをねらって今のスタイル「1000年の学校」ができている。今年度は「ふるさとの山の暮らしコース」「田舎のものづくりコース」「未来につなげる文化コース」が用意されていてなかなか楽しい。

このことが、観光客を増加させることにつながってはいないが、この地に愛着を持つ人の増加、住民のまちづくりマインドの向上には確実につながっていると思う。

